「第八回日銀グランプリ ～キャンパスからの提言～」の決勝開催

▼日本銀行では、昨年十二月一日、大学生を主な対象とする金融経済分野の小論文・プレゼンテーションのコンテスト「第八回日銀グランプリ～キャンパスからの提言～」の決勝を本店において開催しました。

前回に引続き今回のテーマも、「わが国の金融への提言」。わが国の金融に関する課題の指摘と、それに対する処方箋の提案を競ってもらいました。

▼今回は全国各地の四六校から過去最高となる一三六編の論文が寄せられました。一次審査（書類審査）の結果、五チーム（東京理科大学経営学部、明治大学商学部、成城大学社会イノベーション学部、慶應義塾大学経済学部、専修大学商学部〈応募受付順。以下同じ〉）が決勝に進出しました。

熱気あふれるプレゼンテーション

また、惜しくも決勝進出には至らなかったものの、決勝進出チームに次ぐ上位にランクされた九チーム（同志社大学、東京理科大学、香川大学、名古屋大学、中央大学、新潟大学、東北学院大学、東京経済大学、東京大学）が「佳作」に選定されました。

▼決勝当日は、決勝進出チームがそれぞれ一五分間のプレゼンテーションを行った後、審査員からの質問に答えるというかたちで進められました。審査員には、前原金一氏（経済同友会副代表幹事・専務理事）、永沢裕美子氏（フォスター・フォーラム〈良質な金融商品を育てる会〉事務局長）をお招きしたほか、日本銀行から西村清彦副総裁（審査員長）、宮尾龍蔵、石田浩二両政策委員会審議委員が参加しました。

和やかな中にも審査員からするどい質問が投げ掛けられる

▼厳正なる審査の結果、最優秀賞には、明治大学商学部チームの「起業アイデアの新たなコンテスト方式～Facebook活用によるアイデアの進化を目指して～」が選ばれました。ソーシャル・ネットワーキング・システム（SNS）の一つであるフェイスブックを利用して、大学内で皆がアイデアを出し合いながら、起業コンテストを行うというものです。その際、フェイスブックの機能を利用して、アイデアに磨きを掛けたり、大勢の評価を集約することを実現しようという提言です。審査員からは、「フェイスブックの『いいね！』ボタ

最優秀賞に輝いた明治大学商学部チームの皆さん

決勝進出チームの皆さん・審査員を囲んで

ンがどれだけ押されたかでコンテストの優勝者を決定する仕組みは、非常にシンプルで分かり易く、かつ実現可能性も高いと思われる」「コメント機能を活用してアイデアをブラッシュアップしていけるという点は、従来のコンテストにはない利点である」などの点が高く評価されました。このほか優秀賞二チーム、敢闘賞二チームを、次の通り選出しました。

【最優秀賞】

●明治大学・商学部チーム

「起業アイデアの新たなコンテスト方式～Facebook活用によるアイデアの進化を目指して～」

【優秀賞】

●成城大学社会イノベーション学部チーム

「ネットとリアルのつながり金融～ITと人的サポートを融合した二一世紀型金融ビジネス～」

●専修大学商学部チーム

「高齢者向け金融教育チーム『出張知るぽると号』～プロボノとボランティアの二人三脚～」

【敢闘賞】

●東京理科大学経営学部チーム

「宝くじ型ファンド～『感情』から始まる社会への貢献～」

●慶應義塾大学経済学部チーム

「伝統文化を活かした長期投資のしくみ～海外政府系ファンドを対象とした日本庭園ファンド設立の提案～」

▼審査終了後、審査員から、「今回の応募作品においては、クラウドファンディング、ソーシャル・ネットワーキング・システムや電子マネーといったIT新技術の活用、東日本大震災からの復興、高齢化社会への対応といった話題性に富むテーマも目立ち、バラエティが広がっている。また、提言の深みという点でも年々レベルアップしているように思う」「特に、この場に臨んだ五チームの提言では、わが国の金融に関して明確な問題意識を抱き、問題や状況を的確に理解した上で、アンケート調査や実務家への聞き取り調査などを行っていた。頭でっかちになり過ぎず、地に足の着いた視点から、学生らしい提言に結びつけている点は、高く評価できる」との総評がありました。

審査員長（西村副総裁）の講評

▼日銀グランプリについては、日本銀行ホームページに専用コーナーを設けて、概要、決勝参加チームの作品全文および審査員講評等を紹介しています。また、同コーナーでは、過去の決勝大会の模様等を収録した動画（約四分間）も配信しています。http://www.boj.or.jp/announcements/nichigin_gp/index.htm/

▼「日銀グランプリ～キャンパスからの提言～」は、来年度も開催する予定です。全国各地で一人でも多くの学生の方々が、若者らしい問題意識に基づき、自ら主体的に調べ、考えることを通じて、金融面の課題に挑戦していただけることを心から期待しています。

貨幣博物館企画展
おかね道中記―旅で使う貨幣―
を開催しています
五月十二日まで

▼古都観光のため東京駅から新幹線で京都へ（一三〇〇〇円）。昼食湯豆腐（二〇〇〇円）、お土産京銘菓（六〇〇円）、宿泊代（六〇〇〇円）、…。そんな旅の記録を書いたことはありませんか？

東海道の起点・日本橋を出発して伊勢参詣、足を延ばして京都、金比羅巡り。わらじ一二文、安倍川餅二五文、大井川渡し三二〇文、宿泊代二〇〇文、…。江戸時代の旅人も道中の支払いなどを記録しました。

古代に国家が銭貨を発行して以降、貨幣制度の移り変わりとともに、旅におけるお金の使われ方も変化してきました。

本企画展では、当館で所蔵する貨幣や旅に関する古文書、絵画などにより、古代から明治初期までの旅で、お金がどのように使われていたかをご紹介します。

「銭刀（ぜにがたな）」盗難を避けるためお金を隠して旅をした

＜会期中の開館時間等＞

【開館時間】
九時三十分～十六時三十分
（入館は十六時まで）

【休館日】
月曜日、祝日
（ただし土曜日・日曜日と重なる場合は開館）

【入館料】
無料

【所在地】
東京都中央区日本橋本石町
一―三―一（日本銀行分館内）

【お問い合わせ先】
〇三―三二七七―三〇三七

※最新の開館情報は貨幣博物館ＨＰをご覧ください。
http://www.imes.boj.or.jp/cm/

編集後記

■本号が皆さんのお手許に届くのは春爛漫（らんまん）の頃であるが、今、厳冬の最中にこの文章を書いている。先日、東京では珍しく、まとまった規模の積雪があった。あいにく、インフルエンザの高熱にうなされていたため、雪だるまなどの芸術作品を作ることも叶わなかった。いつにも増して、春が待ち遠しい思いがした。（鮎瀬）

■「君よ、勝田（かつた）の風になれ」。前号で取材した茨城県ひたちなか市の玄関口、勝田駅で目にした第61回勝田全国マラソンのポスターである。その場で衝動的に参加を申込んだ。

春まだ遠い1月下旬、再訪したひたちなかでは市民の温かさが身に沁みた。どこまでも続く沿道の応援。行く先々で大勢の老若男女が、声援とともに飴、バナナ、チョコレートなどを手渡してくれる。炊き出しをふるまう町内会や飲物を提供する企業もあった。

練習不足がたたって「30キロの壁」を前にして脚が止まり、疲労困憊（ひろうこんぱい）で初マラソンのゴールに辿りついた。痛みと疲れで挫けそうになる心を支えてくれたのは、何千回何万回と繰り返された「がんばれ！」の温かい声だった。（ＴＯ）

■今回で8回目をむかえた日銀グランプリ。今年も全国各地の学生さんから、甲乙つけがたい力作ぞろいの論文が寄せられました。決勝当日の会場は、審査員の方々の様々な質問に応戦する学生さんの熱気で溢れていました。そんな熱い姿を見ながら、学生さんの提言が、そう遠くない未来に実現されることを期待せずにはいられませんでした。日銀グランプリは、来年度も開催する予定です。チャレンジ精神旺盛な学生さんの挑戦をお待ちしています！　（ＫＡ）

※本誌は、全国の日本銀行本支店および貨幣博物館、旧小樽支店金融資料館等でお配りしています。個人の方の定期購読、郵送はお取り扱いしておりませんのでご了承ください。なお、既刊号全文をPDFファイル形式で日本銀行ホームページ上に掲載していますのでご利用ください。（http://www.boj.or.jp/announcements/koho_nichigin/index.htm/）

※本誌に掲載している内容は、必ずしも日本銀行の見解を反映しているものではありません。日本銀行の政策・業務運営に関する公式見解等については、日本銀行ホームページ（http://www.boj.or.jp/）をご覧ください。

にちぎん　2013年春号
編集・発行人　鮎瀬典夫
発行　日本銀行情報サービス局
〒103-8660
東京都中央区日本橋本石町2-1-1
☎03-3277-2405

デザイン　株式会社市川事務所
印刷　音羽印刷株式会社
©日本銀行情報サービス局　禁無断転載

＊本誌の用紙は、環境・社会・経済のすべての側面に配慮した厳しい基準に従って適切に管理された森林からの木材を原料としていることを示す、FSC認証紙を使用しています。